

公開シンポジウム 「分野を越え海を越える昆虫科学」

日本学術会議・日本昆虫科学連合・日本昆虫学会・日本応用動物昆虫学会 共同主催

2024年3月30日(土)15:15~18:15
ハイブリッド開催

日本昆虫学会第84回大会
第68回日本応用動物昆虫学会大会
合同大会

公開シンポジウム

分野を越え 海を越える 昆虫科学

2024年3月30日(土)

15:15~18:15

仙台国際センター 大ホール

<http://www.aobayama.jp/>

入場
無料

オンライン
参加
無料

●総司会

徳田 誠 (佐賀大学)

●開会の挨拶

堀 雅敏 (日本昆虫学会・日本応用動物昆虫学会合同大会長, 東北大学)

●活動報告

小野 正人 (第24・25期分科会委員長, 日本学術会議連携会員, 玉川大学)

日本学術会議農学委員会応用昆虫学分科会の活動

阿部 芳久 (連合副代表, 日本学術会議連携会員, 九州大学)

日本昆虫科学連合の活動

●学術講演 I 「分野を越える」

座長: 池田 素子 (日本学術会議連携会員, 名古屋大学)

山下 恵 (東京農工大学)

「衛星から森林害虫マイマイガの大発生を探る」

武田 征士 (京都府立大学)

「虫こぶ: 植物ソース器官からシンク器官への転換」

●学術講演 II 「海を越える」

座長: 高須賀 圭三 (慶應義塾大学)

後藤 慎介 (大阪公立大学)

「南極で昆虫採集: ナンキョクユスリカの生きるしくみ」

清水 加耶 (島根大学)

「ボルネオ島の熱帯雨林における昆虫と植物の相互作用」

●第27回国際昆虫学会議 (ICE2024 Kyoto) [2024年8月, 京都]の紹介

座長: 井上 真紀 (東京農工大学)

志賀 向子 (日本学術会議連携会員, 大阪大学)

「ICE2024 Kyoto—知の統合による新たな発見」

吉村 真由美 (国立研究開発法人 森林研究・整備機構 森林総合研究所)

「ICE2024 Kyoto—一般向けイベントの紹介」

●総合討論

座長: 池田 素子

●閉会の挨拶

小野 正人

参加お申込みは
こちら

- 申込期間: 2月22日(木)~3月24日(日) (予定)
- 申込方法: 右のQRコードを読み込んでください。

オンライン登録は先着1000名まで



QRコードが使えない場合は、「日本昆虫科学連合」の
ウェブサイトからお申し込みください。
<http://www.insect-sciences.jp/>

●問い合わせ先: 日本昆虫科学連合事務局 E-mail: contact@insect-sciences2.sakura.ne.jp

共同主催: 日本学術会議・日本昆虫科学連合・日本昆虫学会・日本応用動物昆虫学会

公開シンポジウム

「分野を越え海を越える昆虫科学」

日本学術会議・日本昆虫科学連合・日本昆虫学会・日本応用動物昆虫学会 共同主催

日時：2024年3月30日（土）15:15～18:15

場所：ハイブリッド開催

オフライン（対面）：仙台国際センター 大ホール (<http://www.aobayama.jp/>)

オンライン：Zoom ウェビナー

参加費：無料

概要：一般の方々にとって昆虫科学とは「昆虫の同定や分類を行う学問」や「昆虫を駆除するための学問」であり、その広範さには目が行き渡りづらいのが現状であろう。この状況を改善し、昆虫を対象として生物の多様性と共通性の理解に貢献する昆虫科学の広範さを皆さんに知って頂く機会として、本シンポジウムを企画した。本シンポジウムは大きく4つのセクションからなり、まず日本学術会議農学委員会応用昆虫学分科会および日本昆虫科学連合の活動報告を行う。次の学術講演の第I部では「分野を越える」と銘打ち、異分野の融合による新しい昆虫科学分野を紹介する。続く学術講演の第II部では「海を越える」と銘打ち、南極から熱帯まで海外に生息する昆虫についての研究が活発に実施されていることを紹介する。これら学術講演の第I部と第II部に併せて、44年ぶりに日本で開催される第27回国際昆虫学会議（ICE2024 Kyoto, 2024年8月25日～30日、日本学術会議と日本昆虫科学連合の共同主催）の魅力をお伝えする。国際会議では専門家による最先端の研究発表が日々展開されるが、身近な昆虫たちの魅力を分かり易く解説する市民プログラムなども計画されている。以上の内容を包括した総合討論を経て、多くの方々に昆虫科学の広範さを知っていただく機会としたい。

合同シンポジウム委員 阿部 芳久、井上 真紀、後藤 慎介、高須賀 圭三、徳田 誠

総合司会

徳田 誠（佐賀大学）

プログラム

開会の挨拶

堀 雅敏（日本応用動物昆虫学会・日本昆虫学会合同大会長、東北大学）

活動報告

日本学術会議農学委員会応用昆虫学分科会の活動

小野 正人（日本学術会議連携会員、玉川大学）

日本昆虫科学連合の活動

阿部 芳久（連合副代表、日本学術会議連携会員、九州大学）

学術講演Ⅰ「分野を越える」

座長：池田 素子（日本学術会議連携会員，名古屋大学）

衛星から森林害虫マイマイガの大発生を探る

山下 恵（東京農工大学）

虫こぶ：植物ソース器官からシンク器官への転換

武田 征士（京都府立大学）

学術講演Ⅱ「海を越える」

座長：高須賀 圭三（慶應義塾大学）

南極で昆虫採集：ナンキョクユスリカの生きるしくみ

後藤 慎介（大阪公立大学）

ボルネオ島の熱帯雨林における昆虫と植物の相互作用

清水 加耶（島根大学）

第27回国際昆虫学会議(ICE2024 Kyoto)[2024年8月, 京都]の紹介

座長：井上 真紀（東京農工大学）

ICE2024 Kyoto—知の統合による新たな発見

志賀 向子（日本学術会議連携会員，大阪大学）

ICE2024 Kyoto 一般向けイベントの紹介

吉村 真由美（国立研究開発法人 森林研究・整備機構 森林総合研究所）

総合討論

座長：池田 素子

閉会の挨拶

小野 正人

日本学術会議農学委員会応用昆虫学分科会の活動

小野 正人（玉川大学 学術研究所/ 第 24, 25 期分科会委員長）

日本学術会議は、日本の平和的復興、人類社会の福祉に貢献し、世界の学界と提携して学術の進歩に寄与することを使命とし、日本学術会議法に基づいて設立された日本のアカデミーである。人文・社会科学（第 1 部）、生命科学（第 2 部）、理学・医学（第 3 部）に属する全科学者の代表機関といえ、210 名（定員）の会員と約 2,000 名の連携会員で構成されている。「応用昆虫学分科会」は、30 ある分野別委員会の「農学委員会」内に設置され、2005 年の新設以来 3 件の意思の発出を行い当該分野の進展に貢献してきた。さらに、日本昆虫科学連合の発足(2010)にも深く関わり、その連合内に第 27 回国際昆虫学会議の組織委員会を置き、8 月の開催に向けて準備が進められている。昆虫という地球上でもっとも多様化・繁栄し、人類とも密接な関係を持ち続けてきた生物を通じた国際協力、衛生環境と健康の維持、食料生産の安定化、男女が等しく参画した研究・教育活動の推進などに対して、日本のプレゼンスを高めることにつながるものと期待される。2050 年問題を思料した際に、昆虫科学関連の諸活動は、国連の掲げる「SDGs」にも寄り添うものである。異分野融合を常態とする属性を有する当分科会における情報収集と分析、その成果の社会への積極的な発出には大きな意義があるものと考えている。

講演者紹介

小野 正人（おの まさと）

所属：玉川大学農学部生産農学科昆虫科学領域

<兼任>大学院農学研究科資源生物学専攻応用動物昆虫科学研究分野
学術研究所 / 脳科学研究所 / 研究推進事業部

〒194-8610 東京都町田市玉川学園 6-1-1

略歴：

- 1988 年 玉川大学大学院農学研究科博士課程修了（農学博士）
- 1998 年 カナダ国サイモンフレーザー大学理学部客員研究員（～1999 年）
- 2005 年 玉川大学教授（～現在）
- 2013 年 玉川大学農学部長/大学院農学研究科長/農産研究センター長（～2019 年）
- 2019 年 玉川大学学術研究所 所長（～現在）
- 2023 年 玉川大学研究推進事業部 部長（～現在）

- 2013 年 日本昆虫学会 副会長（～2014 年）
- 2014 年 日本学術会議 連携会員（～現在）
- 2020 年 第 27 回国際昆虫学会議(ICE2024 Kyoto)組織委員会 委員長（～現在）
- 2021 年 日本応用動物昆虫学会 会長（代表理事）（～2023）
- 2022 年 日本昆虫科学連合 代表（～現在）

- 1990 年 オオスズメバチの配偶行動に関する研究（井上研究奨励賞）
- 1996 年 日本在来種マルハナバチの実用化に関する研究（環境賞）
- 2004 年 日本応用動物昆虫学会 学会賞
- 2022 年 日本昆虫学会 論文賞

主な研究テーマ：

1. 真社会性ハチ類の行動生態学、化学生態学
2. 日本在来種マルハナバチ類の機能利用
3. ESTEAM と SDGs を念頭においた昆虫学

日本昆虫科学連合の活動

阿部 芳久（九州大学 院比文）

日本昆虫科学連合はわが国における昆虫科学の発展と社会貢献を目的として2010年に発足し、現在は17の学協会が所属してお互いに連携しながら活動している。今年度の主な活動内容は公開シンポジウムの開催、ならびに2024年8月25～30日に国立京都国際会館で開催予定の第27回国際昆虫学会議（ICE2024 Kyoto）の準備である。

2024年3月30日に日本学術会議および日本昆虫学会、日本応用動物昆虫学会とともに公開シンポジウム「分野を越え海を越える昆虫科学」を共同主催する。テーマが「New Discoveries through Consilience」であるICE2024 Kyotoを意識して、異分野の知を統合した新たな昆虫科学分野の研究や、日本人による海外での昆虫科学の調査・研究について、各分野を牽引する研究者がわかりやすく解説する。併せてICE2024 Kyotoの魅力について、その準備にあたる組織委員が紹介する。

本連合のもとに設置された組織委員会がICE2024 Kyotoの開催の準備を進めている。この国際会議には口頭およびポスターを合わせて2,750の演題が既に集まっており、日本学術会議と本連合が共同主催する。国際昆虫学会議の日本招致に果たした本連合の役割についても振り返る。

講演者紹介

阿部 芳久（あべ よしひさ）

所属：

九州大学大学院比較社会文化研究院生物多様性講座

<兼任>農学研究院 昆虫科学・新産業創生研究センター

総合研究博物館

熱帯農学研究センター

〒819-0395 福岡市西区元岡 744

略歴：

1989年 九州大学大学院農学研究科博士課程修了（農学博士）

千葉県立中央博物館と京都府立大学勤務を経て

2007年 九州大学大学院比較社会文化研究院 教授（～現在）

2018年 一般社団法人日本昆虫学会会長（代表理事）（～2020年）

2020年 日本学術会議 特任連携会員を経て連携会員（～現在）

2020年 北九州市立自然史・歴史博物館協議会会長（～現在）

2022年 日本昆虫科学連合副代表（～現在）

2024年 一般社団法人日本応用動物昆虫学会第70回大会運営委員長（～現在）

2016年 ハモグリバエとその寄生蜂の研究により第60回 日本応用動物昆虫学会賞を受賞

主な研究テーマ：

- ・昆虫（主に膜翅目タマバチ上科）の分類や生態に関する研究
- ・外来昆虫（ハモグリバエ・インゲンテントウ）の生態とその防除に関する研究
- ・希少種（オオルリシジミ・サンショウバラハタマバチ）の保全に関する研究

研究および教育、社会活動の詳細は九州大学研究者情報を御覧ください

<https://hyoka.ofc.kyushu-u.ac.jp/search/details/K003171/index.html>

衛星から森林害虫マイマイガの大発生を探る

山下 恵（東京農工大学 農）

マイマイガは周期的に大発生する森林害虫である。春から夏にかけて大発生する幼虫が葉を大量に食い尽くすと、展葉期にも関わらず季節外れの落葉によって樹冠の状態が短期間で変化する。このような樹冠変化を、人工衛星が定期的に観測する地表面画像を時系列解析することで、被害領域の検出や被害程度の把握が可能となる。そこで、森林環境や生態系の攪乱要因の一つである森林害虫の管理（Forest IPM）に資する広域発生情報の提供を目的に、衛星リモートセンシング分野で植生モニタリングに広く使われている正規化植生指数（NDVI）を用い、近年マイマイガが大発生したノヴォシビルスクとアルタイ（ロシア）および富山の森林を対象に、被害領域と被害程度から発生動態を解析した。ノヴォシビルスク、アルタイ、富山では、気候、地形、土地利用／土地被覆、森林の規模や樹種等の違いから、被害分布の地理的特徴、発生から終息までの経年的変化の特徴を明らかにした。また、広域性をもつ衛星画像を用いた解析では、何かしらの主題に関する面積推定を得意とする。富山での解析では、NDVIの減少量から食害葉面積を推定し、さらに、マイマイガの生涯食餌量実験結果に基づいて、大発生時における個体群密度の推定を試みた。

講演者紹介

山下 恵（やました めぐみ）

所属：東京農工大学大学院農学研究院

略歴：

1996年 お茶の水女子大学文教育学部地理学科卒業

1997-2003年 （株）パスコインターナショナル環境資源調査部技師

1999-2003年 JST/CREST 技術員として出向

2004-2013年 近畿測量専門学校専任講師

2012年 博士（工学） 東京大学

2013年-現在 東京農工大学大学院

研究テーマ：専門は空間情報学です。空間情報技術を駆使したマルチスケール観測による地域環境モニタリングを通して、農地や森林における植物生産力の評価や、気候変動にともなう地域への影響と脆弱性の評価に取り組んでいます。

虫こぶ:植物ソース器官からシンク器官への転換

武田 征士 (京都府立大学 院)

最近では、遺伝子組換えやゲノム編集技術によって、八重咲や色の違う花など植物の性質を変えられるようになってきたが、それでも植物に「思いっきり」違う構造物を作ることはできない。その点、昆虫は素晴らしい。特殊な技術を使わなくても、植物組織を改変して食料兼住まいである「虫こぶ」を作ることができる。

虫こぶ (虫えい, ゴール: gall) は、昆虫やダニ、線虫などが植物に作る特殊な組織である。特に昆虫が作る虫こぶの多くは、一見果実のように見えるが、これらはホスト植物が本来作る果実とは全く形態が異なる。このことは、虫こぶ形成昆虫が植物の器官発生システムを利用して、自分に都合の良い組織を作る能力を持つことを示している。この機構が分かれば、今までにない新しい植物改良技術が開発できると考え、虫こぶ形成プロセスの研究を進めている。数種の虫こぶの形態・遺伝子解析から、虫こぶでは葉などの光合成 (ソース) 器官から、果実などの蓄積 (シンク) 器官への転換が、遺伝子発現レベルで起こっている事が示唆された。昆虫がいかに植物側の遺伝子発現を変化させているのか、まだ謎だらけではあるが、これまでの研究から分かってきたことを紹介する。

講演者紹介

武田 征士 (たけだ せいじ)

所属・職名:

- ①京都府立大学 大学院 生命環境科学研究科 細胞工学研究室 准教授
- ②京都府生物資源研究センター 参事
- ③未来食研究開発センター株式会社 取締役

略歴

1976年 大分県大分市生まれ
1994~1999年 京都大学 理学部
1999~2001年 京都大学大学院 理学研究科 修士課程 (生物学)
2001~2004年 京都大学大学院 理学研究科 博士課程 (生物学)
2004~2007年 ジョニネスセンター (英国) ポスドク研究院
2007~2011年 奈良先端科学技術大学院大学 バイオサイエンス研究科 特任助教
2011~2018年 京都府立大学 大学院 生命環境科学研究科 助教
2018年~ 同上, 准教授
2022年~ 未来食研究開発センター株式会社設立, 取締役

主な研究テーマ

- ① 植物の器官発生 (花, 虫こぶ)
- ② 農作物と食用昆虫を用いた環境循環の食料生産技術の構築
- ③ 自然栽培 (無農薬・無化学肥料による作物栽培) の生物多様性評価

南極で昆虫採集:ナンキョクユスリカの生きるしくみ

後藤 慎介 (大阪公立大学 院理)

ナンキョクユスリカ *Belgica antarctica* (ハエ目ユスリカ科) は最も南に生息する昆虫で、南極半島 (南極大陸の一部) とその近くの島々に生息している。本種は2年1化で、生活史のほとんどを幼虫として過ごす。幼虫は短い夏の間だけ発育し、冬の間は凍った土に囲まれて発育を停止する。幼虫は3回目の夏に一斉に蛹、成虫となり、成虫は羽化後数日以内に交尾・産卵を行う。幼虫は凍結、低温や高温、酸やアルカリ、無酸素、高浸透圧といったストレスに耐えることができる。これまで多くの研究者がこのストレス耐性獲得機構の解明に取り組んできたが、そもそも本種が南極でどのような生活をしているのかについてはほとんど明らかになっていなかった。白夜 (夜も明るい条件) となる南極の夏の間、幼虫・成虫は一日の中で周期的な活動を行うのだろうか、あるいは一日中活動し続けるのだろうか? 周期的な活動は生物時計によって制御されているのだろうか? 幼虫は、3回目の夏をどのようにして一斉に蛹・成虫となるのだろうか? 本講演では、南極で生活するナンキョクユスリカを通して昆虫 (そして生命) のすばらしさを紹介したい。

講演者紹介

後藤 慎介 (ごとう しんすけ)

所属: 大阪公立大学大学院理学研究科

略歴:

1999年 北海道大学大学院地球環境科学研究科修了 博士 (地球環境科学)

2000年~2002年 オハイオ州立大学昆虫学科博士研究員

2002年~2022年 大阪市立大学大学院理学研究科 講師, 准教授, 教授

2022年~現在 大阪公立大学大学院理学研究科 教授

2010年 日本昆虫学会 若手奨励賞受賞

2014年~現在 Fellow of the Royal Entomological Society

2014年~2022年 Physiological Entomology 誌 編集長

2022年 日本応用動物昆虫学会 学会賞受賞

研究テーマ: 動物が環境に適応するしくみとその進化をテーマに研究しています。動物たちはどのようにして朝が来るのを知るのでしょくか、冬が来るのを知るのでしょくか、海岸近くの動物は潮の満ち引きをどのように知るのでしょくか、寒さや乾燥といった厳しい環境をどのようにして乗り越えるのでしょくか。今でも「生きものってすごいなあ」という思いで研究しています。

詳細は大阪公立大学研究者情報 <https://kyoiku-kenkyudb.omu.ac.jp/html/100000328_ja.html> および研究室のウェブサイト <<https://www.omu.ac.jp/sci/biol-aphys/index.html>> を御覧ください。

ボルネオ島の熱帯雨林における昆虫と植物の相互作用

清水 加耶 (島根大学 生物資源科学部)

東南アジアの赤道直下に位置するボルネオ島では、一年を通して温暖で湿潤な気候のもと、極めて多様な樹種からなる熱帯雨林が成立している。とくに低標高地の熱帯雨林は、陸上生態系の中で最も生物多様性が高いとも言われている。そんな森で必ず目にする昆虫はアリである。アリの種数・バイオマスの豊富さを背景に、熱帯地域では「アリ植物」と呼ばれる植物種が多数存在する。アリ植物とは、植物体の一部が空洞となり、その空間にアリを住まわせる植物をさす。アリ植物に住み込んだアリは宿主の表面を歩き回り、植食性昆虫などを排除して宿主の成長や生存に寄与することがある。そのため、アリ植物の中には植物自身が被食防衛のために生産する化学物質の量を低く抑えるなど、アリに対植食者防衛をほぼ委ねるような種類も見られる。トウダイグサ科オオバギ属には25種類ほどのアリ植物種が含まれ、とくにボルネオ島でその多様性が高い。住み込むアリの種はオオバギの種類によって異なり、それぞれのアリ種の攻撃性なども異なっている。ほとんどのオオバギ属アリ植物はアリを介した防衛に成功しているが、一部の植食性昆虫はアリの攻撃をかわしアリ植物を食べている。講演では、シジミチョウやナナフシなどの植食性昆虫と、植物・アリとの攻防を紹介したい。

講演者紹介

清水 加耶 (しみず かや)

所属：

島根大学生物資源科学部

略歴：

2014年京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程修了(人間・環境学博士)

京都大学生態学研究センター非常勤研究員、日本学術振興会特別研究員(PD)などを経て、2017年より島根大学生物資源科学部助教

ナナフシ2種のアリ植物の寄主利用様式に関する論文で2016年度日本昆虫学会論文賞受賞、オオバギ属アリ植物に住むアリによる被食防衛の程度に関する研究で2017年度日本熱帯生態学会吉良賞奨励賞受賞

主な研究テーマ：

アリ植物を利用する植食性昆虫の生態、東南アジア熱帯雨林の訪花昆虫群集など

ICE2024 Kyoto—知の統合による新たな発見

志賀 向子（大阪大学）

44年ぶりに国際昆虫学会議（ICE）が日本にやってくる。ICEは4年ごとに開催される昆虫学のオリンピックだ。ICE2024では、世界中から2000名を超える昆虫学者が最新の研究成果を持って京都に集い、様々な議論が展開される予定である。今回、ICE2024はNew discovery through consilience（知の統合による新たな発見）というテーマを掲げ実施される。昆虫学は、分子生物学、生化学、分類学、生理学、発生生物学、形態学、行動学、生態学、進化生物学など多様な分野を含む学問として、長い研究歴史の中発展してきた。これまで様々な分野に影響を与え洗練されてきた一方、専門化、分断化する傾向にもある。これは、生きた昆虫の本質的な生物学的特性を見落とすというリスクにつながる可能性がある。そのような背景の中、ICE2024は、各研究者が持ち寄る研究結果とその背後にある理論を分野を超えて結びつけ、互いの知識を関連させることにより、新たな発見につなげることを目指す。本会議は20の学術セッションやWomen in Entomologyという男女共同参画を推進するプログラムなどにより構成される。様々な知識、考えを持ち寄り相手の意見に耳を傾け、新たな発見、知的冒険を見通す昆虫学の未来につなげたい。

講演者紹介

志賀 向子（しが さきこ）

所属：大阪大学大学院理学研究科

略歴：

1993年 岡山大学大学院自然科学研究科修了 博士（理学）

1993年～2016年 大阪市立大学大学院理学研究科 助手、講師、准教授、教授

1997年～1998年 アリゾナ大学 ARL Division of Neurobiology 在外研究員

2016年～現在 大阪大学大学院理学研究科 教授

研究テーマ： 昆虫や巻貝を対象に、脳のしくみに興味を持ち研究しています。研究テーマは、体内時計を使った季節適応、環境適応メカニズムです。昆虫の生き方は多様でその行動やしくみには目を見張るものがあります。そこには私たちが生きるヒントや工夫に満ち溢れているように感じ、日々感動しながら研究に取り組んでいます。

詳細は researchmap でご覧ください <<https://researchmap.jp/read0182838>>

ICE2024 Kyoto 一般向けイベントの紹介

吉村 真由美 (国立研究開発法人 森林研究・整備機構 森林総合研究所)

生き物への眼差しが暖かい日本で、第27回国際昆虫学会議を開催することになった。前回日本で開催されたのは1980年であり、実に44年ぶりに国際昆虫学会議が日本に戻ってきたことになる。日本人は昔から自然に対して畏怖の念を抱き、自然万物の中に神の存在を感じてきた。生き物へは慈愛をもって接してきた。古事記や日本書紀の中にも生き物への愛を読み取ることができる。日本は生き物への慈愛に満ち溢れた多様性に富んだ国なのである。その日本では、現在も数多くの在野の昆虫研究者や昆虫マニア、昆虫写真家が活動している。子供たちの多くも昆虫が大好きである。そこで、生き物好きの一般市民を巻き込んで、国際昆虫学会議開催の機運を盛り上げるための「しかけ」を企画した。招致を行うための核となる「ロゴ」のデザインを一般公募したのも、その一つである。また、海外から参加する昆虫研究者に日本の一般市民の昆虫愛を知ってもらうため、一般市民による作品（絵画や写真）を募集し会場内で展示することにした。その一方、昆虫研究の一般市民への還元という視点で、3つの市民プログラムを企画した。一般市民が関わることのできるイベントについて紹介したい。

講演者紹介

吉村 真由美 (よしむら まゆみ)

所属：国立研究開発法人 森林研究・整備機構 森林総合研究所

略歴：大阪府生まれ。奈良女子大学大学院理学研究科修了、大阪府立大学大学院農学生命科学研究科中途退学、博士(理学)。

運輸省にて航空関係の業務に携わったのち、農林水産省入省。森林総合研究所四国支所研究員、国立研究開発法人森林総合研究所企画部研究評価室長をへて、現在は国立研究開発法人森林研究・整備機構森林総合研究所関西支所グループ長。

研究テーマ： 溪流性水生昆虫の生理生態学、森林構造と生物群集との関係解明、放射性セシウム汚染による水生生物への影響、生態系サービスや生物多様性保全に関わる研究などを行っている。詳細は [researchmap](https://researchmap.jp/m_yoshimura) でご覧ください<https://researchmap.jp/m_yoshimura>